

---

# デジソウル！

中村アキラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デジソウル！

### 【Nコード】

N4166K

### 【作者名】

中村アキラ

### 【あらすじ】

なんの変哲もない日常は、空虚を齎す。なにかに思いつめていた神成龍一は、デジタルワールドにあるブラックウオーグレイモンの石碑に行き、語りかけるのが日課としていた。そのとき、一つの鏡を見つけた。龍一は鏡を石碑に向けて魅せようとしたとき……。これは、人間とデジモンの関係が超越しすぎた物語。

## 第零話 再誕

肺に水蒸気という空気を深く吸い込み、全身を雨に打たれるかのように濡らす。ある一室、一人の青年は顔をうつむかせながら無表情で突っ立っていた。コレといって悩みがあるわけではない。ただ心身のどこかに空虚感が居座っているような気がしてならないのだ。なぜそうなったかという経緯を思い当たっても、それに当てはまる節は何処にもない。しかし、それを理由なしに除くことも出来ないとなると、余計に遣る瀬無くなる。

つまり、彼が欲しているものは、その気持ちを晴らすための答えなのだ。

「はあ……」

口から漏れていく溜め息も、先刻からこのことを考えていたからなおだろう。虚しい気持ちというものは、儚く、切ない。

「どうしたんだ、龍一。さっきから暗い顔をして」

彼の様子を見かねたのか、肩まで浸かっていたもう一人の青年が話し掛けてきた。名前を呼ばれて、シャワーを止めた彼は、火照った顔をあげた。まるで、全てを発散させるかのように短く溜め息をする。

「別に、なんでもない」

そういうと彼——龍一はゆっくりと湯船に入り始めた。その表情はとても疲弊ひへいしきっているかのように冷めきっていた。

「水臭い事をいうな。何か悩み事があるんなら言っちゃえばいいのに」

目を細め、首まで浸かる龍一を横目に煌輝くわうきは大きく鼻で溜め息をついていった。

「そう簡単に悩みが晴れてくれるのならば、今さらこの宛てのない気持ちなど何処にもないはずだよ」

素っ気無くいうと、目を閉じて無想した。なにも考えず、なにも

感じず、なにも想わない。ただの人形のように――。

＊

――自分はすでに死んでいる。実体はない。なのに、心の奥底から感じてくるものは一体何処からくるのか。そして、龍一と出会ってから恩着せがましく思うのは何故なのか、彼の前で微笑み、悲しみ……たかが石の中に居るというのに、全てを曝け出してしまふのは如何してなのだろうか。

「こころ……心とはなんだ？ 一体何処に心というものは存在するんだ……？」

漆黒の竜人は心中で呟くと目を細めた。目の前にある白い花が一輪、大地に小さく鮮やかに咲いていた。それはとても艶麗えんれいで可愛らしいモノだった。漆黒の竜人はしゃがみ込むと、しばらくその花を見つめていた。どういうことだろうか、それは花を見ているうちに自然と穏やかな気持ちになっていった。だがそれは反対に、心覚えのない空虚まで引き連れてくる。そしてそれは、己の意思まで襲い掛かるのだ。二つの噛み合わない歯車は、ジレンマとなり苦しみとなる。なにかもが撞着して感じる。

「それが、この俺の運命だったというのか……」

再び漆黒の竜人が心の中で呟いた。もし初めから心をもたずに誕生していれば、苦悩せずに快樂してヤツの僕になれた。だが、自分の運命は変わってしまった。たった一つのプログラムが混入したことで意思を持つてしまった。それが宿命さだめというならば、己の身体からだを滅しよう。それとも「心」というものの全てを捨象するか。

しかしそれもできなかった。なぜなのかはわからない。ただなんとなく、誰かを想うような気持ちがあるのだから、今ここに居るのだ。漆黒の竜人は再び瞼を開いた。

＊

龍一も無想をやめると、何かが吹っ切れたのか、顔を凜とさせた。まるで清々しいものを感じているかのようだ。

「私、そろそろ出ますよ」

「なんだ、もう出るのか？」

同じ湯船に入っただけしばらく経たないうちに出てしまう龍一を気に、煌輝はいった。

「ああ、これ以上入ってたら逆上してしまいますからね」

そういつて龍一は、風呂から出てくるとバスタオルを顔に当てた。無音。それもその筈だ。久々に二人の帰りが遅くなった事もあり、二人が同時に入浴した時間は深夜の二時をも回ってしまった。当然、親たちはすでに寢床についているので、静かに物音を立てないようにしなければならぬ。

が、彼は当たり前といわんばかりに、パジャマではなく。パーカーとジーパンという普段着を身に纏った。すると風呂を後から出てきた煌輝が、まだぬれている髪をバスタオルで拭きながら云った。

「龍一、今日も行くのか？」

「無論です。墓に居る彼の寂しさを慰めないと……ね」

頷くと、パソコンの電源を入れた。

「そう……。気をつけてな」

煌輝は日課ともいえる龍一の行動が最初からわかっていったのか、何気ない顔をして一つ言葉を添えた。

一見してみれば、何処にでも居るような兄弟として変わらぬ日常を送っているような風貌を見せている。だが龍一と煌輝は時として普通とは違う顔を持つ。むしろそれは、十数年前の不思議な出会いをしていなければ、普通以上の日常をしていなかったのだろう。

パソコンをつけてから一分も経たないうち、龍一はある言葉を呟いた。

「デジタルゲート、オープン」

すると突如、パソコンの画面が強く煌いたかと思うと、龍一の身

体がその光に包み込まれ、まるで稲光の如くその姿を消した。その一部始終を見ていた煌輝は、誰も居ない椅子をしばしみつめてた。そして、大きな溜め息を吐くと、自分の寢床へと就いた。

意識が戻り五感がはつきりすると、龍一はふと目を覚ました。飛び込んできたのは、青々と茂った芝だった。冷たく新鮮すぎるような空気がはつきりと氣道を通って肺に送られてくるのがわかる。風呂であつたまつたばかりで、体がほかほかする合間に吸う自然の空気が、また格別なものだろう。

そして龍一はゆっくりと立ち上がると、顔をあげた。静まった夜。キラキラと光る星達が黒い雲に隠れることもなく輝いていた。とても美しい三日月の明かりの下、そこにはある竜人を模した模様が刻まれた石碑があつた。龍一は、傍まで寄つてくると足を止めしゃがみ込み合唱した。そして話しかけるように言った。

「今日もやってきましたよ、ブラックウオーグレイモン」

微笑む顔を石碑に向けると、以前から親しんでいたかのように文様に指を触れた。伝わってくるのは、外気よりも冷たいものだった。

「あつたかいだろう？ 寒くなったもんだからさ、今宵は冷えますよ……。今日も大学が遅くなつてしまつて、今晚の飯も私の友達と食べてきたんだよ。それはもうにぎやかな話で盛り上がつて、楽しい時間なんかあつという間だったんだ。その後も勉強会をしていったから遅くなつてしまつたんだ」

触れる先々から奪われてゆく温かさとは引き換えに、寂しかったことを感じさせるような冷たさが伝わってくる。むしろ孤独だったことが、指先から感じ取れる。それが否かどうかは分からないが、龍一にはそう思えた。その後も今日あつた出来事を話していった。彼の大学でサークルや友人のこと。とにかく話したいことは山々あつた。今日あつたことはすべて話してしまいたいぐらい、言葉一つにも熱が入っていった。

「俺、この空しさが一体なのか分からないんだ。何に對して不満に思っているのか。何が物足りないのか、何か大切なことを忘れてしまっているんだと思うんだけど、それさえ何なのか——考えているうちに訳が分からなくなっちゃったからやめたんだけどね」

石碑に背を向けて寄りかかると、顔を上げて夜空を望んだ。すべてを言い尽くしてしまったのか、それっきり龍一は噤んでしまった。「なにいつちゃってるんだろう、どうでもいいことなのに……」

心中でぼつんと呟いたのはそれだけだった。たかが石碑に喋りかけたところで、答えてくれることはない。全て独り言に過ぎないのだ。龍一は寒さを凌ぎたいのか、うずくまると二の腕をさすった。足元もとても冷たく、両手も縛られてくる。

ふと地面に目をやった。すると芝と砂地の境に黒い物体がポツンとあった。

「ん？」

声を上げると、龍一は目を細くした。

彼は警戒し、腰を低くして立ち上がると何分間もじっと黒い物体を見つめていた。だが、動いているのは芝に咲いている野草の花だけだ。慎重に引いていた腰を立て直すと、前へ踏み出す。黒い物体の手前で足を止めると、月明かりを受けて、自分のぼんやりとした影が落ちた。右手で一瞬触れると、咄嗟に後ろへ飛びのいた。しかし何も起こらない。龍一は恐る恐る黒い物体を掴みあげた。

こんな物体がどこにあったというのだろうか。あるいは、誰かの落し物か。それは鮮やかな黒い長方形をしていて、五センチしかない厚さ。大きさも賞状ぐらいに満たないワリには少し重みを感じる。彼の目にそれは、美しくも恐ろしくも見えた。どこから現れたのだろうか？ なにか目的があつてここにきたのだろうか？ 考えると、さらに不安になった。何かの間違いでここに送られてきたのだろうか？ それとも、自分のためなのか？ 古から言い伝えることを思い出す限り、これは魔法と関係があるかもしれない。下手に扱って

はならないのだ。

では、どうすればいいのか？ 持ち帰るにしても置く場所をとってしまっただろうし、まして危険であるとは言いい切れない。このまま手放して帰ったほうが良いのか。躊躇<sup>ためら</sup>いがよぎり、彼は黒い物体をそのまま地面に置こうとした。が、ある思いがその手を止めた。もしこれに仕掛けがあつて何か起きるものだったら……。よく見れば黒い物体には手にかけるところがあつた。一度周囲を見渡し誰もいないことを警視すると、龍一は息を呑みゆっくりと黒い物体の中身を開いた。

一瞬、龍一は目を閉じた。氷のように冷たい刺激が背中を縦断した。瞬く間にそれは全身を駆け巡っていくと凍りつかせていった。しかし、それは何の前触れもなく起きることはなかった。不審に思つた龍一は、怯えながらもうつすらと目を開いた。そこには、自分が反転した姿が鮮明に映つていた。

「かがみ……。なんだ、ただの鏡か」

彼の中で、張り詰めていた糸がぷつりと切れた。硬くなつていた表情が一気に和らいだ。何も起こらないことを確信したのだ。

「どうやらただの鏡だったよ。誰が落としたかわからないけどね」

というと、彼は鏡を開いた状態で石碑に向けた。刹那、月光がまばゆく目に刺さつた。思わず龍一は呻<sup>うめ</sup>くと左手の甲で両目をふさいだ。しかし、右手には鏡を強く握つたままだつた。暫くの間、眩む臉をあげることができなかった。

やがて暗闇にも慣れたとき、龍一は周囲を恐れながら目をあけた。先ほどの閃光で景色が一変したような錯覚をおぼえる。それはまるで幻を見せられているようだった。いや、これは幻なのか？

現実に戻された彼は、突如眼前に現れたモノに我の目を疑つた。

「……………」

彼は思わず声を呑んだ。それはまるで自分の黒い陰が実体となつ

て現れているかのようなだった。周りが静かすぎるのか、巨大な生き物の大きな息づかいが耳元で囁いて聞こえる。龍一は全身の鳥肌を抑えながらいった。

「お、お前は……！」

すると、そいつの視線は龍一へと向けられた。脳裏に浮かぶおぞましい事を連想する度、背筋がぞつとさせる。何度も石碑に見舞いしに行っているのに、実際に見た本物は桁外れだ。鍛え抜かれた肉体に鎧、黒竜に似た様相は迫力と威圧感を与えてくる。震えあがる声を抑えながら、龍一はそれに問いかけた。

「おまえは、ブラック……ウォー……グレイモン？」

「……いかにも、俺はブラックウォーグレイモンだ」

恐怖のあまり、龍一の呼吸は知らず知らずのうちに荒くあがっていた。目の前で起こった異様な出来事がまだ信じられないでいるから、全身の震えが止まらないでいるのだ。その様子に、漆黒の竜人は目を細める。警戒しているのか、その目はこちらを睨んでいるようにも見えた。

低く空気を震わすかのようなうなる声が聞こえた。「貴様は、誰だ」

龍一は殺伐とした空気に圧倒されながらも、昂ってくる抑え難い感情を落ち着かせていた。だが、相手の問いに答えるだけなのに、唇が震えて思うように言葉が出てこない。この感情を自制心で取り除くのは無理そうだった。しかし龍一は、それを振り切るかのようにいった。

「覚えていないのか？ 私は、神成龍一だ」

「カミナリ……リュウイチ？」

龍一は深く二度うなずいた。すると、漆黒の竜人の右手が上がった。鋭い爪先を龍一に向けて、それは今にも突き刺そうとしていた。「ドラモンキラーで私を突き刺すつもりか」

あまりにも大きな戦慄の波が全身を襲うあまり、龍一は思わず震える声を上げた。忘却でもされてしまったのか？ いや、そんなは

ずはない。たとえその種の系統族であるブラックウォーグレイモンでも、最期まで一緒だった龍一へのプライドを棄てることは絶対にありえない事だ。なのになぜ豹変したのか。恐怖以上に震え上がる彼はもう、そんなことを考えることもできず、ただ自分の無念を思うだけだった。

「もうだめだ。私はここで死ぬのか……」

そう思った刹那、ついに爪を立てて振り落とされた。反射的に目を閉じ、すべてを真つ暗にした。なにもかも、これが自分の最期だと想いながら。

ところがどうしたのだろうか、躰には突き刺さるような痛みが感じられなかった。龍一は恐る恐るうつすらと瞼を開けると、漆黒の竜人の右手を見やった。確かに爪が自分の躰を貫いている。しかし、そこから血を流している様子などなかった。いくら仰天したとはいえ、彼は不思議に思わざるをえなかった。

「これは、一体どうなってるんだ？」

焦るどころか、パニックになる龍一。そのときだった。遠くから何者かの声が聞こえてくる。幻聴にすぎぬような耳鳴りが一瞬間こえたかと思うと、その声は明瞭なものとなった。「おちつけ」と。

龍一は意味わからなかった。龍一はどこかに叫んだ。

「おちつけて——何を落ち着かせればいいのです！」

「とりあえず深呼吸をするんだ！」

なにもわからぬまま龍一はその声が云うことに従った。もしその人が天の声だっただろうと、従えば助かるのだ。深呼吸をして、精神を落ち着かすことはできた。しかし、どこから自分のことを見ているのか——いや、そんなことを考えるのは後回しにしておこう。

龍一は余計なことは頭に置かず、次の指示を待った。

「そいつは、データの一部がウイルスで破壊されている状態にいる。だから君の記憶も殆どないどころか、行動の異常まで出ている。痛みなしに君の体を爪が貫いているのは、君がブラックウォーグレイ

モンを無意識にデータだと認知して、体を透過させたんだろう」

説明しているうちに、突き刺さっていた爪が体を離れた。恐怖と葛藤しながら龍一はやつの様子を凝視し、ぶるぶる震える手を抑えた。

確かに、よく見れば異様ともいえる。なにかに洗脳されかけているかのように、静かに軀を震わせて苦心<sup>くしんさんたん</sup>惨憺していた。息は荒く、もの狂いで脱しようと精一杯な表情を龍一に訴えかけていた。

「どうすればいいのですか？」

「逃げる——遠くへだ！」

答えはすぐに返ってきたが、龍一は一瞬躊躇った。が、爪が体から離れている以上逃げられるのは今しかない。次刺さるときには間違<sup>デリット</sup>いなく死だ。龍一は一步後ろへ退くと、断ち切るかのように振り返って走り出した。寒さも極限に達する空気を斬り、ついに感覚を失った足裏をただひたすら前へと敏捷に運び、地面を蹴った。ブラツクウオーグレイモンに背を向けて、決して跡を振り返るうともしなかった。

龍一は元来た道を走りながら、ふつふつと沸いてくる疑問を頭の中でめぐらせていた。なぜ奴は再誕することができ、なぜウィルスに掛かり記憶をなくし、襲い掛かったのか？ あれだけ一緒に過<sup>データ</sup>ごし、石碑に居ても語りかけていたあの日々は記憶に過ぎなかったのか？ そしてそもそも、どこからか自分自身を見て、テレパシーとやらで話していた奴は何者だったのか？ 奴は再誕したブラツクウオーグレイモンに何をするつもりなのか？ 今思うことは、奴のすべての記憶をなくした時のショックとそれによる失望だった。

やがて、自分の来たデジタルゲートへと戻ってきた。龍一は立ち止まると、後ろを一つ振り返った。儚さと空しさが残る。それはまた一つの蟠りとなり、残ってしまったからだだった。深いため息を突くと龍一はデジタルワールドを抜け出した。

## 第零話 再誕（後書き）

### 次話

なぜ、奴はすべての記憶をなくしたのだろうか？  
なぜ、ウィルスにかかったのか？  
そもそも奴は、なぜ再誕したのだろうか？  
自分の中に残る一つの蟠りは、一体何を求めているのか？

### 第壱話 運命 さだめ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4166k/>

---

デジソウル！

2010年10月8日23時33分発行